

セイレネス・ロンド

く歌姫は幻影と歌うく

00 ≪ プロローグ

00-01 ≪ 宣言文 -type declaration statement-

さて、始めますか。

青年はけだるげに宣言した。縛られていた両手は、今や自由だ。青年が手を軽く振る。青年を取り押さえようとした男たちが血飛沫を上げてもんどりうった。広場の周りに立ち並ぶ家々が、連鎖的に爆発した。爆風が広場に集まっていた人々をなぎ倒す。音速を超えて飛んできたガラスが人々に突き刺さる。

人々は逃げ惑う。とにかく青年から離れようと逃げ惑う。銃撃音が村中を跳ね回る。火薬と錆釘の臭いが広場を澱ませる。肉の焼ける臭いは、実に香ばしかった。

青年はただひとり、逃げずに立っている赤毛の少女を見ながら言った。

「全員、死んでもらう」

少女は唾を飲む。白く細い首がぐいと動いた。

「なんで——」

「これはね」

少女の問いに言葉を被せる。青年は諭すような口調で言った。

「世界平和のためなんだ」

00102 《赤毛の少女

あの日――。

思い出したくもない、あの日。

「うんざりする」

今見ていたものが夢だとわかっていても。

首を振り、ようやくベッドから起き上がった少女は、部屋の様子をしげしげと眺めまわした。見慣れない部屋、見慣れない家具。ベッドの近くの本棚は、まだ空だ。小さなキッチンには部屋の備品である湯沸かしポットと、自分で持ってきたマグカップがぼつんと一つ。

「転校初日だっていうのに……」

少女は見事に赤い頭髪に手をやりながら呟いた。

そして朝食用に昨夜調達しておいた菓子パンの袋を開け、インスタントコーヒーを作る。

テレビもないので、沈黙した部屋の中で黙々とパンとコーヒーを胃に流し込む。三分程度で食事を終えると、寝巻代わりに着ていたジャージを脱ぎ捨てて、真新しい士官学校の制服を身に着けた。

ざっくりと身だしなみを整え、最後に洗面所の鏡で髪型をチェックする。その鮮烈なほどの赤毛は、短くしていることもあって所々がどうしても跳ねる。もういっそベリーショートにし

てやろうかと思うことも度々あったが、いざその時になると怖気づいてしまうため、未だに短め、という領域から抜け出せていない。少女は十八歳だったが、未だ化粧はしたことがない。しかしそれでもなお、誰もが二度見するほどの肌理きめの細かな白い肌と、鋭利な輝きを持つ紺色の瞳、よく整った目鼻立ちが持つ雰囲気は、間違ひなく美貌に属するものと言えた。

彼女の特徴はそれだけではない。彼女は並外れた高身長たかたかの持ち主だった。百八十五センチにもなる。手足も長く、頭は小さい。一言で言えばスーパーモデルのようなシルエットの持ち主だった。

成績も優秀で、昨年度までいたユーメラの士官学校では同期の中では五本指に入るほどの結果を残していた。それだけに、何故今この時期に転校を命じられたのか、今一つ納得がいかない所でもあった。だが、少女は命令には従順だったし、そもそも彼女の立場では「拒否」という選択肢はそもそももない。かくして、少女は士官学校の総本山とも言えるヤーグベルテ統合首都校へやって来た。今は士官学校の敷地内にある寮の一室を与えられている。

携帯端末の時計を見て、少し早めに部屋を出た。

「あら、早いね」

玄関の近くで寮の管理人が声を掛けてきた。眼鏡をかけた中年の女性である。恐らくは退役軍人だろうなど少女は見当をつけている。管理人は少女の完璧なまでの美貌をしばしばと見つめ、そしてやや上——天井灯のあたりを見上げながら言った。

「ええと、メラル……」

「カティ・メラルティンです」

「ああ、そう、カティね」

管理人はそこから何か言葉を続けようとしたが、少女——カティ——は足早にその場を去っていた。彼女にとって、他人とのコミュニケーションは苦痛だったし、苦手だった。容姿に触れられるのも嫌だったし、過去に触れられるのはもはや禁忌と言っても良いくらいだった。話をすれば、話題は必然的にどちらかに及ぶ。とりわけ過去を思い出す事は、カティにとっては拷問に近い。

だからカティは基本的には仏頂面だったし、自分から話しかけることなど誰に対してもあり得なかった。話しかけられても無視こそしないが、すぐに会話を終わらせる。それには彼女の高身長が役に立った。黙っていてもプレッシャーを掛けられるので、よほどの奇特な人物でもない限り、進んでカティと長々とコミュニケーションをしようなどと考える人物はいなかった。

外に出ると、十月の風が吹いていた。ヤーグベルテ統合首都は緯度が高いため、十月ともなれば寒いくらいだ。あと一ヶ月もすれば雪が降る。

カティは「コートくらいどこかで調達してくればよかった」と少しだけ後悔しながら、遠くに見える校舎まで走った。

遠くなるカティの背中を眺める視線があった。

「ミステイルティン……か」

その視線の主は、何故だかすごく退屈そうに、そう言った。

00103 《世界の頂点に居座る男

ミスティルティン——。

ともかくも、プロセスはまた一つ進んだ。

自分の指先すら見えないような完全なる闇の中で、彼は眩いた。その途端、闇の中に彼の姿が照らし出される。彼は暗黒色のスーツを身に着けていたので、その手と顔だけが闇の中に浮かんでいるように見えた。外見的には十代後半、いつていても二十歳そこそこといったところだろう。闇の中に於いて一際輝いて見える銀髪と、鮮血のような真紅の瞳が、まるでこの世ならざる何かを連想させる。

そこにぼんやりとした銀色の何かが見れる。人型のようにも見えたり、炎のようにも見えた。それを敢えて一言で言うならば、名状し難い何かだ。

「全て——」

その銀の姿が言う。その声には掴み所がまるでなく、高いとも低いとも言えないが、とにかく女声だった。

「全てはあなたの目論見通り……」

「そう」

彼は肯く。

「セイレスシーケンス歌姫計画が、ようやく動き出す」

「ふふふ、セイレスシーケンス歌姫計画、ね」

銀の姿が笑う。

「ずいぶん、待ったものね」

「そうだね。あとはどの程度、あの子たちが運命の道順を守ってくれるか、だね」

「ふふ、残酷な人……」

「僕にティルヴィングを手渡した張本人がそれを言うのかい？」

彼は微笑を浮かべている。その左目が、強く輝いていた。それに直視された銀の姿が、ふわりと揺らめく。

「今度の所有者は、私に何を見せてくれるのかしら。楽しみだわ」

「ふふ、僕は君との賭けに負けるつもりはないよ」

「あらあら……今まで一度とて、私との賭けに勝てた者はいないわよ」

その切り返しに、青年は変わらぬ微笑を浮かべている。

「ティルヴィングに纏まとわるそのすべての記憶を消し去ってしまう君がそんなことを言ったところで、何の説得力もないよ。そうだね、それをして悪魔的と言うのだろうね」

「それもそうね。悪魔と呼ばれたことの方が多いわ」

「ともかく——」

「青年はツイと口角を上げた。」

「僕はロキなんかになろうというわけじゃないんだ」

「知っているわ、ジョルジュ・ベルリオーズ。あなたの目論見は」

「ふふ——」

銀の姿の言葉を冷たい笑い声で掻き消す青年。

「君は全てを知っていると思っただけで、果たしてその思い込みは正しいのかな？」

「あなたは、そうね、ファウストのようなもの。私にとって未知であろうが既知であろうが、私にとっては関心のないこと。ただ聞きたいだけよ、あの言葉を」

「悪魔よ、そなたは美しい——かい？」

青年——ベルリオーズは如何にも関心がなさそうに言う。銀の姿はこれ見よがしに揺らめいた。ベルリオーズは目を細めて、闇に浮かぶ銀の炎に囁いた。

「盲目のファウストを後ろから墓穴に蹴り入れるくらい、君にはわけもないことだろう？
でも残念ながら、僕は全てを見通す目を持っている。物理的にも、論理的にもね」

「ふふふ、そうと言うのなら、そうなんでしょうね」

挑発的な声音で返す銀の揺らめき。ベルリオーズはそれを一笑に付す。

「事の真偽はともかくとして、僕はね、関心があるんだ」

「関心？」

「そう。関心さ。この複素数の世界に対して、僕は大きいに関心があるのさ」

ベルリオーズはそう言い、銀の炎は一度大きく揺れて、掻き消えた。

「さて」

その気配が完全に消えたのを確認してから、ベルリオーズは一度目を伏せた。そしてぼそりと口にした。

「バルムンク発動」
アトラクト

その眩きと同時に、闇の世界に光が生まれ、そして世界は完全に光に飲み込まれた。純白の世界の中に、黒づくめのベルリオーズが一人、浮かんでいる。風もないのに、見事な銀髪が揺らいでいる。

この純白の空間は、ベルリオーズが開発したシステム『ジークフリート』によって生成されている。世界のシステムは、その全てが今やジークフリートの支配下にあり、あらゆる被造物はジークフリートからの干渉を受けていると言っても過言ではない。それはつまり、この惑星の全てのシステムは、ベルリオーズの支配下にあるということを示している。

「ふうん、さすがは世界樹だ」

ベルリオーズは飛び交う数式を捕まえては目を細める。

あの銀の悪魔によって与えられた『ティルヴィング』を継承して生成された『ジークフリート』は、開発者であるベルリオーズをしても、その全容が掌握できているわけではない。だ

エクステンド

がしかし、それは間違いなく世界を変えたシステムである。それまでの「OS」という概念をまるで覆し、電子的システムの根本部分にパラダイムシフトを引き起こした。瞬く間に世界を覆いつくしたジークフリートは、それと同時に既存のシステムのほぼ全てを駆逐し、あるいは、食らい尽くした。

人々は当初こそ危機感と警戒感を持ちはしたものの、完璧な安定性と堅牢性が次々と実証されていくにつれ、そしてまた導入の容易さに触発され、気が付けばほぼすべてのシステムが、ジークフリートの関与を受けることとなった。残されたのはごく少数のスタンダードアローンタイプのシステムくらいだった。

そんな驚くべきシステムを、このジョルジュ・ベルリオーズは西暦二〇七〇年、若干十六歳の若さで世に出した。ジークフリートが世界を覆いつくすのに要したのは僅かに三年に過ぎず、その間にベルリオーズは巨万の富を手にした。それから十年が経過した今、彼は個人でありながら国家レベルの力を有するようになっていた。何より、ベルリオーズを頂点とした軍産企業複合体『ヴァラスキャルヴ』が及ぼす影響力は、世界のパワーバランスを一変させるだけの力を持っていた。

世界規模のパワーシフトを起こす力を持つベルリオーズは、しかし、未だに表立った行動を起こしてはいなかったし、起こす気もなかった。ベルリオーズは表向きは、天才技術者であると同時に実業家であり、そしてまた慈善活動家であった。

「オーシュ」

ベルリオーズがそう一言口にする、その目の前に三つの球体のような多面体が現れた。白金色、灰色、そして黒。それぞれの球体はそんな色に輝いていた。

「響^オ応^シ統^イ合^シ構^シ造^シ体^ユ……誰^ガがそう名付けたのやら」

誰^ガが名を付けたわけでもないのに、それはシステムとしてその名を持っていた。それは現実相とは違う世界——つまり、論理相——からエネルギーを引き出すことのできるシステムである。人々は従来、現実相と呼び得る「現実世界」の中でしか、エネルギーをやりくりできなかった。だが、ティルヴィングが与えられ、ジークフリートが生成され、そして、オーシュが構築され、その常識は打ち破られた。

「もうすぐだ。もうすぐ、君たちの世界が——刹那の世界が、始まる」

ベルリオーズは左目を一際赤く輝かせながら、その球状の多面体たちに向かって囁きかけた。